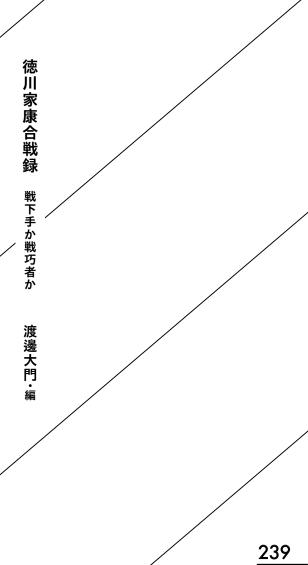
渡邊大門·編



若大将から 天下人へ!

家 康 に つ き ま と う **戦 下 手** と い う 俗 説 は **真 実** か ?

NHK どうする家康 の背景が分かる



SEIKAISHA SHINSHO

九・二十年(一六一四・一五)の大坂の陣の二つに違いない。家康は前者の戦いを制すること で、江戸幕府開幕への足掛かりを築き上げた。後者の戦いでは、豊臣秀頼を死に追いやるこ 残っているのは、天下取りの戦いでもあった、慶長五年(一六〇〇)の関ヶ原合戦と慶長十 とで、徳川公儀の存在を確固たるものにした。そうした点で、この二つの合戦は家康にとっ 徳川家康の合戦といえば、どの戦いを思い浮かべるだろうか。おそらく鮮烈な印象として

て意義深いものがあった。

三・六四)の三河一向一揆は、戦いの性質からして、大名相手の合戦とやや様相を異にして 実は、 あえて加えるならば、天正十年(一五八二) 天正十二年(一五八四)の小牧・長久手の戦いを挙げるにすぎない。永禄六・七(一五六 家康が主体となって戦った主な合戦は、この二つだけといっても過言ではないだろ の織田信長死後における武田氏遺領の争奪

ほかの合戦は、おおむね織田信長、豊臣秀吉の天下取りの戦いに動員されたものだったと

は晩年の約十五年に過ぎなかったのである。 家康は長寿を保ったが、信長や秀吉に動員されたのではなく、 主体的に戦ったの

家康といえば、戦巧者というイメージが乏しい。 それは、数多くの合戦にまつわるマイナ

体で逃げたといわれているが、こちらも根拠のない逸話であって、事実とは言えないことが 明らかとなっている。こうした誤った逸話によって、武将としての家康はネガティブなイメ れている。 れている。 ス・イメージの逸話に拠るところが大きいだろう。 元亀三年(一五七三)の三方ヶ原の戦いで敗北した家康は、 さらに、敗北の戒めとして、自らの姿を描かせたというが、こうした説は否定さ あるいは、家康は大坂夏の陣で真田信繁の率いる軍勢に敗北を喫し、這う這うの あまりの恐怖に脱糞したといわ

日頃から鷹狩りを趣味とし、合戦の勘を鈍らせないようにしていた。同時に、長寿を保つべ を欠かすことなく、剣術、馬術、弓術、鉄砲に優れていたことが明らかにされている。 ージで伝わっている。 ところが、現実の家康は決して臆病者でも、戦が下手でもなかった。家康は日頃から鍛錬

主要な合戦を取り上げた。これまで家康の合戦を論じる際は、先述した逸話や伝承の類によ 本書は永禄三年(一五六〇)の桶狭間の戦いを嚆矢として、最晩年 の大坂の陣に至るま

に配慮し、薬学、医学への造詣が深かったといわれている。

実だが、本書では合戦の経緯などを含め、一次史料を用いることに留意した。そして、これ もちろん、合戦を論じる際は、軍記物語などの二次史料を使わざるを得ない面があるのは事 る叙述、あるいは二次史料を用いることで、誤った印象を与えることが少なからずあった。 までの俗説を改めるよう心掛けた。

していただけると幸いである。 本書では家康の代表的な合戦を取り上げたので、ぜひともご一読いただき、認識を新たに

渡邊大門

はじめに 3

徳川氏略系図 8

第二章 三方原の戦が三河一向一家 桶狭間の戦

揆

第四章

第三章

第五章

長篠の戦い

渡邊大門 安藤弥 11 29

太田浩司 47

柴裕之

69

光成準治 93

第六章

第七章 武 田氏旧領争奪戦 城の戦い

第九章 第八章 小田原合戦 小 牧 ・長久手の戦い

第十章 関ヶ原の戦い

第十章 大坂冬の陣・夏の陣

155

秦野裕介

137

115

梯弘人 173

水野伍貴 191

211

お

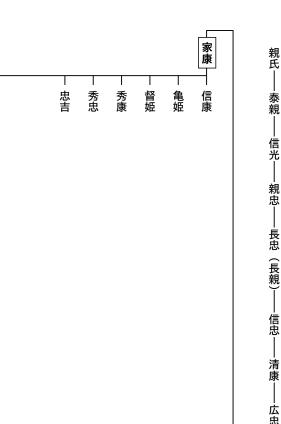
わりに

236

徳川家康略年譜

233

図版/ジェオ



-泰親: ——信光——親忠-——長忠(長親)——信忠——清康 -広忠—

第一章

渡邊大門

(わたなべ・だいもん)

町幕府を変えた将軍暗殺』(ちくま新書、二〇二二年)など。と文化の研究所代表取締役。主要業績:『嘉吉の乱 室科博士後期課程修了。博士(文学)。現在、株式会社歴史刊九六七年神奈川県生まれ。佛教大学大学院文学研究

今川氏の人質となった家内

桶狭間の戦いについて述べる前に、 徳川家康が今川家の人質となった経緯について触れる

は清康・広忠と二代にわたって不慮の死を遂げたことを憚ったのだろう。 忠が「病死」したと書かれている。 の岩松八弥に斬り殺された。 天文十八年(一五四九)三月六日、 広忠が惨殺された事件には異説がある。 家康の祖父の松平清康も配下の者に討たれたので、 家康の父・松平広忠は岡崎城 (愛知県岡崎市) 『松平記』などには、 内で家臣 同書 広

籠る安祥城(愛知県安城市)を攻撃した。織田方も必死に応戦したが、同年十一月九日に落 城したのである。 同年十一月、義元は太原雪斎に命じて、再び三河に大軍を送り込み、織田信秀の子・信広が 主がいない状態になった。義元はただちに太原雪斎を岡崎城に派遣すると、これを接収した。 広忠が亡くなると、子の竹千代(のちの家康)が織田氏の人質になっていたので、 岡崎城は

と送られた。 のである。 交換する条件を織田方に持ち掛けた。この交換交渉は成立し、竹千代は今川方に戻ってきた の結果、 しかし、 義元は岡崎城に代官を派遣し、西三河における拠点を維持しようとしたのであ 信広は捕虜になった。 竹千代は岡崎に滞在することを許されず、そのまま駿府 太原雪斎は竹千代の身柄を奪還すべく、 (静岡市葵区) 捕虜 の信広と

敗北した織田信秀の三河侵攻は失敗に終わり、天文二十年(一五五一)に病没したので

(没年は諸説あり)、家督は後継者の信長に託された。 岡崎 『から駿府へと送られた竹千代は、どのような生活を送っていたのだろうか。

物語』)、宮の前(『松平記』)、宮ヶ崎などである。幼い竹千代は、太原雪斎から学問を授けら 竹千代がいた駿府の具体的な場所は、諸書によってさまざまである。少将の宮の町(『三河 祖母・於富から手習いを学んだという。ただ、いずれも近世の編纂物に記されたもので、

明確な史料的裏付けがあるわけではない。 元信と名乗った。元信は名実ともに、今川氏の配下になったのである。翌弘治二年(一五五 天文二十四年(弘治元年。一五五五)三月、竹千代は元服すると、義元の偏諱を授けられ、

吉は、松平家再興のために蓄えた城内の米や銭を見せたという逸話がある。 六)六月、元信は一時的に岡崎に戻り、新当主のお披露目を行った。このとき家臣の鳥居忠 弘治三年(一五五七)一月(あるいは三月)、元信は妻を娶った。妻の名は築山殿といい、今

成人の髪形に結うこと)を務めた。義広の妻は義元の妹だったので、築山殿は義元の姪だった。 川家の家臣で一族の関口義広の娘であった。義広は元信が元服したとき、理髪(頭髪を整えて 元信は、今川氏一門に準じる扱いの武将になったのである。

同年五月から永禄元年(一五五八)七月の間に、元信は元康と改名した。「康」字は、祖父・

清康 で、義元は永禄元年二月、元康 を追い詰 配下に 《の名から取ったものである。その間も、織田氏と今川氏の抗争は続 あっ め、 た寺部城 その勢いで広瀬、 (愛知県豊田市)の鈴木重辰は、 挙^z 母、 に重辰の討伐を命じたのである。元康は苦しみ 梅ヶ坪、 伊保(愛知県豊田市) 突如として義元に反旗を翻した。 などの諸城に攻め込ん いており、 なが 今川 らも重辰 そこ 氏の

今川義元の出陣

見事

に初陣を飾ったのである。

義元を見事に打ち破ったのだ。桶狭間の位置については諸説あるが、一般的には愛知県名古 義元が織田信長に敗れて戦死したからである。信長は、大軍を率いて尾張に攻め込んで来た 屋市緑区から隣の豊明市にかけての地域とされている。 永禄三年(一五六〇)は、元康 (家康) にとって重要な年になった。 桶狭間の戦 いで、今川

義元が西進した理由については、 ①上洛説、②三河支配安定化説、 ③尾張制圧説、 ④東海

地方制圧説などが

あ

く流布したのは、 である。 |洛説を示しているのは、小瀬甫庵の『信長記』、『当代記』、『松平記』といっ いずれも成立年が 明治三十二年(一八九九)に刊行された参謀本部編『日本戦史 バ ラバラだが、 おおむね慶長年間には完成していた。 上洛説 た二次史料 桶狭間役点 が広

(元真社) 支配下に置こうと考えたのである。 が有力視されている。義元は三河の支配を安定させ、そのうえで信長と雌雄を決し、尾張を の影響である。しかし、現在では上洛説は否定されており、②③をミックスした説

信長のいる尾張を目指したのである。五月十八日には、尾張と三河の国境付近にある沓掛城 (愛知県豊明市)に入城した。 同年五月十二日、義元は自ら大軍勢を率い、領国の駿府を出発した。東海道を西に向かい、 同城の城主は、今川氏配下の近藤景春だった。このとき、

糧を運び込むことが難しいと考えたに違いな にあった。 足していることを訴えた。大高城は織田方にすっかり包囲されるという、 を受けた義元は、 から先鋒を命じられたのが、ほかならない元康だったのである。 その緒戦、 敵に攻囲されたのだから、兵糧を城内に運び込むことは不可能に近か 大高城(名古屋市緑区)を守る今川氏配下の鵜殿長照は、 ただちに兵糧 の補給を元康に命令した。命令を受けた元康は、 義元に城中の兵糧が不 極めて厳 大高城に兵 っ た 、状況

市緑区) した。その際、元康は赤色の武装だったという。そして、そのまま大高城に留まったのであ そのような状況にかかわらず、元康は五月十八日に織田方の鷲津砦と丸根砦(以上、 元康の兵糧補給によって、鵜殿氏が籠る大高城は落城を免れたのだ。 の間を縫うように突撃し、城中に小荷駄隊(兵站の輸送部隊)を送り込むことに成功 名古屋

信長の対応

清須城 五月十九日未明、 こうした情勢において、織田方では軍議を催し、今川氏を相手に積極的に打 (愛知県清須市)に籠城すべきか、議論を戦わせていたが、明確な結論は出なか 今川方の元康と朝比奈泰朝は、 織田方の丸根砦、 鷲津砦に攻め込んだ。 って出 った。

はや信長の敗勢は濃くなっていた。

戦を練るどころか、世間話をする有様だった。信長の真意は、よくわからない。深夜になる うのだろう」と口々に信長の悪口を述べたと伝わっている。 と家臣を帰宅させたが、家臣は「運の末には知恵の鏡が曇るというのは、 むろん、この一報は、信長のもとにももたらされた。信長は戦況を一向に意に介さず、作 こういうことをい

り」と幸若舞「敦盛」を謡い舞うと、出陣の準備を整えた。信長は出陣の合図の法螺貝を吹 で一切動じなかった信長は、突如として「人間五十年、下天のうちを比べれば夢幻の如くな である。 くように命令すると、具足を着用して立ったまま食事し、そのまま兜をかぶると出陣したの 明け方になると、佐久間大学らが今川軍が攻撃してきたことを報告した。すると、それま

勢は、 五月十九日早朝、 わずか二〇〇と伝わっている。やがて、信長は軍勢を熱田神宮(名古屋市熱田区) 信長は小姓五騎のみを引き連れ、居城の清須城をあとにした。 率い に集 た軍

砦は落ちており、煙が上がっていたという。 結させると、今川氏との対決に向けて戦勝祈願を行ったのである。すでに、鷲津・丸根の両

義元の状況

な兵力である。ただし、 後の時代になると、百石につき三人の軍役を課されるようになった。百万石の大名ならば、 三万の兵になる。慶長三年(一五九八)の時点で、遠江は約二十五万石、駿河は約十五万石だ はるかに上回っていた。ところで、この約四万五千という数はあまりに多すぎる。もう少し ったので、合計で約四十万石である。先の基準に当てはめると、約一万二千というのが妥当 一方の義元は、桶狭間山で休息を取っていた。率いた軍勢は、約四万五千。信長の軍勢を 右の基準は慶長年間のものなので、実際はもっと少なかった可能性

討ち死にした。こうして大高城の周辺は今川方によって制圧され、織田勢力は一掃されたの 死した。鷲津砦を守備する織田方の飯尾定宗、織田秀敏は籠城戦を試みたが、それは叶わず 丸根砦を預かる織田方の佐久間盛重は、五百余の兵とともに打って出たが、敗北し自らも戦

今川方の動きは、どうだったのだろうか。大高城にいた元康は、丸根砦に攻撃を仕掛けた。

である。

がある。

川軍は総勢約二万だったといわれているが、義元の本陣を守っていたのは五千から六千くら いの軍勢だったという。 と、早くも戦勝を祝して休息し、来るべき信長との戦いに備えたのである。この時点で、 向かって西に進み、 制 圧後、 義元の率いる本隊は沓掛城を発つと、大高城方面に軍を進めた。その後、さらに ` 南に進路を取った。五月十九日の昼頃、義元の本隊は桶狭間に到着する

川方のほうだった。 ろう。心地よいことだ」と大いに喜び、謡を謡ったという。逆に、士気が高まったのは、今 千秋の兵も約五十が討たれた。この報告を受けた義元は、「矛先は天魔・鬼人も超えきれぬだ 千秋は約三百の兵で今川方に攻撃を仕掛けるが、返り討ちに遭い討ち死にしてしまった。 佐々政次、 信長が桶狭間に進軍したのは、五月十九日午前のことである。中島砦を守備する織田方の 千秋 四郎らは、信長出陣の報告を受けて、大いに士気が上がった。早速、 佐々、 佐々、

に戦いを挑んだ。 信 長が出陣しても、 事態を挽回するのは困難になったに違いないが、 果敢にも出陣し義元

信長の進軍

熱田神宮(名古屋市熱田区) で戦勝祈願を終えた信長は、五月十九日午前に鳴海城 (名古屋

報を得たので、中島砦へ移動しようとした。このとき信長の軍勢は二千だったといわれてい 市緑区)近くの善照寺砦に入った。ここで、織田方は桶狭間に今川方が駐在しているとの情

家の面目になると言ったところで、 は新手なので、敵が大軍でも恐れることはないと檄を飛ばした。そして、敵が攻撃したら引 士気は大いに高まった。 いて止めようとした。しかし、信長は敵兵がここまでの戦いで疲れ切っていること、わが軍 るが、劣勢には変わりなかった。 信長は中島砦に到着すると、さらに兵を進めようとした。すると、家臣らは信長に縋り付 敵が退いたときに攻め込めば、 前田利家らが敵の首を持参した。これにより、 敵を倒すことができるとも述べた。 戦いに勝ったならば、 織田 軍の

激しく打ち付けた。 大明神の神意ではないかと思ったという。 かに視界を妨げるような豪雨に見舞われた。雨には雹が含まれており、 こうして信長は、 すると、 桶狭間への進軍を開始したのである。五月十九日の午後になると、 沓掛峠の楠の大木がにわかに倒れたので、 織田軍の将兵は熱田 今川軍の将兵 への顔を にわ

を取って大声を上げると、今川軍に攻め込むように指示した。今川軍は織田軍が黒煙を上げ 、田方はこの悪天候を活用し、やがて晴れ間がのぞくと義元の本陣に突撃した。 信長は槍

て突撃してきたので、たちまち総崩れになった。弓、槍、鉄砲、幟、指物は散乱し、義元は

19

乗っ く追撃を命じた。 ていた塗輿を捨て敗走した。 信長は、

退却したが、 今川軍は三百ほどの軍勢で、 敵と交戦するうちに兵が討ち取られ

義元の最期

た義元は脱出を試みたが、 い将兵も次々と今川軍を攻撃した。不意を突かれ 今川軍は馬廻 小され 味方は次々と討ち取ら 衆らが次々と討た

窮地に陥った。 すると、 信長配下の服部小平太が義元に斬りか かったが、 逆に膝の口 を

れ

れた今川方は戦意を失い その後、 義元は毛利良勝 に組 斉 の黒母衣衆に加えられた。 に桶狭間 み伏せられ、 か とら退却 ついに首を討ち取られたのである。 した。 義元を討た

桶狭間の戦い後、

良勝は信長

そもそも母衣とは、

矢などから身

斬られて倒れ伏した。 信長も馬から降りて槍で敵を突き伏せると、 に五十くらいまで減ってしまった。 衆、 義元を守りながら 若 織田軍 天白川 丹下砦 哈海城 愛知郡 伊勢湾 へ中島砦 沓掛城 小丸根柴 大高城 太子ヶ根× 桶狭間※ 尾張国 今川軍 知多郡 三河国 碧海郡 緒川城

桶狭間合戦関連図 本多隆成『定本 徳川家康』(吉川弘文館) を参照して作成

良勝は黒母衣衆になったのだから、 を守るため、甲冑に巾広の絹布を付けたものだ。絹布が風で靡くことで、矢の威力を弱めた のである。やがて、母衣は黒、赤、 それまでの軍功が大いに認められたことになろう。 黄に染められ、主君の親衛隊を意味するようになった。

である。 三月の武田氏討伐にも出陣した。良勝は戦いだけではなく、官僚的な役割も果たしていたの その後の良勝は信長に近侍して、吏僚的な役割を果たしたといわれ、天正十年(一五八二) 信長の側近として、良勝が重用されたのは明らかである。

このように戦場で大活躍した良勝であったが、ついに最期が訪れ

信忠は妙覚寺に滞在中だったが、信長横死の情報を得ると、 天正十年六月二日未明、明智光秀が本能寺に滞在中の織田信長を襲撃し、見事に討ち取っ 光秀は信長を殺害したことだけに満足せず、子で嫡男の信忠を討ち取ろうとした。 光秀を迎え撃とうと決心したのである。 ただちに二条新御所に移動した。 当時、

ある。 勝)」の名前を確認できる。とはいえ、単に名前が挙がっているだけで、その最期については は攻略され、無念にも信忠は切腹。『信長公記』の「御討死の衆」を見ると、「毛利新介 明智軍の大勢の将兵を前にして、信忠軍は圧倒的に不利だった。やがて、二条新御所

信忠には多くの将兵が従っており、良勝の姿もあった。しかし、

わからない。

しょせんは多勢に無勢で

お かの説も含めて詳しく取り上げることにしよう。 桶狭間の戦いが奇襲攻撃だったのか、正面から攻め込んだのかについては、 のちほ

元康の状況

境は推 主の義元はこの世にいないのだ した。同時に織田方が来襲する前に、大高城を退去するよう勧められたのである。 同じ日の夕方、元康のもとに外叔父・水野信元の使者・浅井忠道が訪れ、 ,し量るしかないが、父祖伝来の三河支配への強い意欲を抱いたに違いない。 義元の死を報告 元康の心 もはや、

岡崎城(愛知県岡崎市)には今川氏の残党が残っていたので、元康は松平氏の菩提寺・大樹寺 (同)に入り軍事衝突を避けた。同月二十三日、今川氏が岡崎城を捨てたので、元康は晴れて 元康は引き続き情報収集に努め、夜半になって大高城をあとにした。翌五月二十日、未だ

を図ったのである。 の平定に取り組んだ。 永禄三年(一五六〇)の桶狭間合戦後、元康は自立化を目論んで今川方から離反し、西三河 これまで今川氏から苦汁を嘗めさせられていたので、一気に巻き返し

入城したのである。

同時に信長とも抗争を繰り広げ、刈谷(愛知県刈谷市)、小河(同東浦町)、 挙母、 梅ヶ坪

以

四年(一五六一)頃に和睦を結ぶことになった。両者の和睦の内容は、①領域確定、 同豊田市)など、三河と尾張の国境付近に軍を進めていた。その後、元康と信長は、 · ②戦線協

定(ただし自力次第)、③攻守同盟の三点であるとされてきた。

と同盟を結んだほうが良いと考えたのは同じである。ただし、両者の和睦は右に掲出した三 と抗争を繰り広げることは、信長にとって得策ではない。元康としても戦争を避けて、信長 同じ頃、信長は美濃の斎藤氏と戦争をしていた。美濃の斎藤氏に加えて、三河の松平元康

定だけが締結されていたのではないかと指摘されている。 ずれにしても注意すべきは、元康がこの段階では、 まだ信長の配下に収まっていないと

点により構成されていたといわれてきたが、依拠した史料の性質が悪く、

現在では①領域確

城を空けて清須城を訪問する余裕はなかった。また、それぞれの当主が顔を突き合わせ、同 清須同盟については疑義が提示されている。そもそも元康は東三河で今川氏と交戦しており、 の信長のもとを訪れ、会見後に締結したとされてきた。いわゆる清須同盟である。 いうことである。 通説によると、これまで両者の同盟は永禄五年(一五六二)一月に元康が清須城 しかし、

加えて、清須同盟の一次史料がないのは仕方がないとしても、二次史料のなかで比較的信

盟を結ぶ例はこの時期にあまり見られない。

永禄五年一月に清須同盟が結ばれたとされてきたが、最近の研究では右の理由から「なかっ 頼性が高い『信長公記』、『松平記』、『三河物語』などにも、まったく記述がない。

た」と否定されている。

表している。 望していたようであるが、なかなか贈られることはなく、 の足利義輝に対して、 以後の元康の躍進ぶりには目を見張るものがある。 桶狭間の戦いは、 飛脚が用いる早道馬(嵐鹿毛)を献上した。実は、 まさしく元康が躍進するきっかけになったのだ。 永禄四年(一五六一) 御内書のなかで元康に感謝の意を 義輝は信長にも所 三月、 元康は将軍

「奇襲」か「正面攻撃」か

ここで、改めて桶狭間の戦いについて考えてみよう。桶狭間の戦いで信長軍が用いた戦法

は、奇襲攻撃、正面攻撃という二つの説がある。

率いた二~四万というのは、その所領の規模を考慮すると、 万(諸説あり)という大軍に対し、信長はわずか二・三千の兵のみだった。とはいえ、義元の 永禄三年(一五六〇)五月十九日、信長は今川義元を桶狭間の戦いで破った。義元の二~四 あまりに多すぎて不審 である。

信長はわずかな手勢でもって、今川氏の陣に背後から奇襲攻撃をしたというのが通説だった。

異論が提示されている。

しかし、今や有名な「迂回奇襲説」には、

軍に攻め込んだが敗北。敗北後、信長は義元が陣を敷く後ろの山へ軍勢を移動させ、迂回し て進軍したという。 て奇襲することを命じた。そのとき、視界を遮るような豪雨となり、信長軍は悪天候に紛れ |迂回奇襲説||によると、五月十九日の正午頃、信長の家臣・千秋四郎ら約三百の兵が今川

元が油断していると予想し、敢えて激しい暴風雨の中で奇襲戦を仕掛け、 った。そこへ信長軍は背後から義元の本陣へ突撃し、義元を討ったのだ。 義元は大軍を率いていたものの、実際に本陣を守っていたのは、わずか四・五千の軍勢だ つまり、信長は義 義元を討ち取るこ

とに成功したといえよう。

史 えられた。 桶狭間役』により、 上の経過の出典は、 それは、 そもそも小瀬甫庵『信長記』の史料としての性質に疑念が抱かれたか 事実上のお墨付きを与えられた。ところが、この通説には 小瀬甫庵『信長記』であり、先述した明治期の参謀本部編 異儀が 『日本戦 唱

史料の性質の問題

儒学者の小瀬甫庵『信長記』は元和八年(一六二二)に成立したといわれてきたが、今では

慶長十六・十七年(一六一一・一二)年説が有力である。約十年早まったのだ。同書は広く読

まれたが、創作なども含まれており、儒教の影響も強い。 あえて『甫庵信長記』と称することもある。 太田牛一の『信長公記』と区別す

もしろさで、江戸時代には刊本として公刊され、『信長公記』よりも広く読まれた。『信長記』 は歴史の史料というよりも、歴史小説といってもよいだろう。 そもそも『信長記』は、太田牛一の『信長公記』を下敷きとして書いたものである。 かなりの創作を施したといわれている。それゆえ、『信長記』の内容は小説さながらのお 『信長公記』 が客観性と正確性を重んじているのに対し、 甫庵は自身の仕官を目的 とし

ない。『信長記』は基本的に創作性が高く、史料としての価値は劣るので、桶狭間の戦いを論 記』の史料性を担保する論者もいるが、成立年の早い遅いは良質な史料か否かにあまり関係 先述のとおり、『信長記』の成立は十年ほど遅いことが立証された。これをもって『信長

最近の研究では『信長公記』を根拠史料として、次のように指摘された。

じるうえで不適切な史料なのだ。

川軍 千秋四郎らが敗北したことを知った信長は、家臣たちの制止を振り切り、 一の正 義元はわずかな兵に守られ退却したが、最後は信長軍の兵に討ち取られたという。 かか へと軍勢を進めた。当初、大雨が降っていたが、止んだ時点で信長は攻撃命令を ら今川軍に立ち向かった。今川軍を撃破した信長軍は、そのまま義元の本陣に 中島砦を経て今

れが 「正面攻撃説」である(藤本:二〇〇八)。

正面攻撃説」が支持されている。 質の劣る『甫庵信長記』に書かれた「迂回奇襲説」は退けられ、『信長公記』

は、一次史料で正確に把握することは非常に困難である。そもそも広大な戦闘地域で、一人 りがない。一般的に、合戦前後の政治情勢はよくわかるのだが、肝心の戦いの中身について の聞き取りなどをもとにして、再構成するしか手がないのである。 一人の将兵の動きを観察するなど不可能に近い。したがって、実際に戦場に赴いた将兵から 『信長公記』は質の高い史料であるといわれていても、やはり二次史料であることには変わ

史研究でも積極的に用いられるようになった。とはいえ、『甲陽軍鑑』は軍学書としての性格 にできないと考えられる。 が強く、 た義元を討ったという説がある ほ かにも、 つて『甲陽軍鑑』 桶狭間 織田軍は今川軍が乱取り(掠奪)に夢中になった隙を狙って、 !の戦いの記述は、『信長公記』の内容とかけ離れているので、そのまま鵜吞み は誤りが多いとされてきたが、成立事情や書誌学的研究が進み、 (黒田:二○一五)。この説は、『甲陽軍鑑』に基づい 酒盛りをしてい た説であ 歴

解釈や論理の飛躍もあり、定説に至らないのが現状である。 ほ かに .も桶狭間の戦いに関しては、さまざまな説が提供されている。しかし、史料の拡大

主要参考文献

長谷川弘道「永禄三年五月の軍事行動の意図」(『戦国史研究』三五号、一九九八年)

久保田昌希「桶狭間合戦の再検討」(同『戦国大名今川氏と領国支配』吉川弘文館、二〇〇五年)

黒田日出男「桶狭間の戦いと『甲陽軍鑑』」(同『『甲陽軍鑑』の史料論 武田信玄の国家構想』(校倉書房、二〇一五年)

藤本正行『【信長の戦い1】桶狭間・信長の「奇襲神話」は嘘だった』(洋泉社新書y、二〇〇八年)

藤本正行『桶狭間の戦い 信長の決断・義元の誤算』(洋泉社新書』、二〇一〇年)

平野明夫編「桶狭間の戦い」(日本史史料研究会監修/渡邊大門編『信長軍の合戦史』1560-1582』(吉川弘文館、二〇一六年)

28

第十章

(みずの・ともき)

水野伍貴

位取得退学。現在、株式会社歴史と文化の研究所客員研究員。主要業績:「水 野勝成の家督相続と関ヶ原の役」(『十六世紀史論叢』第十七号、二〇二二年)、『関 一九八三年愛知生まれ。高崎経済大学大学院地域政策研究科博士後期課程単

ヶ原への道――豊臣秀吉死後の権力闘争』(東京堂出版、二〇二一年)など。

を図り、 よって、 慶長三年(一五九八)八月十八日、 豊臣政権内で権力闘争が始まる。 それに対して石田三成は、 豊臣秀吉は伏見城 五奉行を中心とした政権運営を目指 徳川家康は、 (京都市伏見区) で病歿した。 豊臣政権における独裁的権力の した。 これに

属の吏僚的な性格を持った大名五人を「五奉行」として後事を託したのである。 名を「五大老」とし、 そのため、 秀吉の後継者である豊臣秀頼は六歳であり、 秀吉は、 徳川家康・前田利家・宇喜多秀家 前田玄以・浅野長政・増田長盛 秀吉の代わりを務めるには若年すぎた。 ・石田三成・長東正家といなっかまさいえ ・上杉景勝・毛利輝元、 五人の有力大 った秀吉直

を形 閥によ や加藤清正といった政権の中枢に関与していない大名を味方にして、家康を中心とした勢力 奉行衆とともに毛利輝元と盟約を結ぶなど、大老・奉行のメンバーと結託して派閥を形成す るというものであった。一方、家康は大老の構成員とは結託しなかった。家康は、 成 康と三成では、派閥の作り方が大きく異なっている。三成は、 家康 して るグループ運営を構想した三成と、 いる。 のビジ 3 家康は最初から大老の構成員すべてを仮想敵としていたと考えられる。 ン は次元が違ってい た 独裁的権力の構築を図る家康、 浅野長政を除いた三人の 大老・奉行のなか 福島正 則

慶長四年(一五九九)閏三月三日に前田利家が病歿し、 同月十日には石田三成も、 加藤清正

ら七将の訴えによって奉行職を追われている。そして、三成の失脚から半年後、 家康は大老

疑いをかける。そして、征討を示唆した軍事的圧力によって屈服させた。この騒動によって メンバ 同年九月、家康は、 ーの排斥に動き出す。 家康暗殺の計画があったとして、利家の跡を継いだ前田利長に謀反の

浅野長政も奉行職を追われている。

老臣・直江兼続の妻子を人質として江戸へ送るよう要求したため、 明するよう要求した。景勝は上洛に応じる返答をしたが、家康はさらに日限をもった催促と、 行動を開始 反の嫌疑をかける。そして、慶長五年(一六〇〇)四月に糾明使を派遣し、 前田利長を排斥した家康は、次いで会津(福島県会津若松市)に在国していた上杉景勝に謀 した。 家康は諸大名に上杉氏の征討を命じ、同年六月十六日に自らも大坂城(大家康は諸大名に上杉氏の征討を命じ、同年六月十六日に自らも大坂城(大 交渉は決裂。 景勝に上洛して釈 家康は軍事

頼の地位を脅かす行動はあったものの、秀頼に対して敵対行動はとっておらず、大老の一人 としての立場を通していた。 していくというものであった。大坂城西之丸を居所とし、さらには天守を築くなど、豊臣秀 本来、関ヶ原の戦いとは豊臣政権における権力闘争にすぎず、

阪市中央区)

を出立した。

このように戦前の家康

の行動は、

大老メンバー一人ひとりを豊臣公儀から孤立させ、

天下人を決める戦いではなかったのである。

排斥

合戦前夜

そして、同日付けで三奉行の檄文が発せられ、そこに家康の罪状を十三ヶ条に亘って書き連 将が中心となっていた。七月十七日、西軍は、 家、三奉行(前田玄以・増田長盛・長東正家)、大谷吉継、小西行長、 討つために挙兵する(以下「西軍」と表記)。この挙兵は、三成のほか、毛利輝元、 煽った。そして、家康が上杉氏の征討へ向かったのを切っ掛けとして、 ねた「内府ちかひの条々」が副えられた。 家康による大老メンバーの排斥は、毛利輝元、宇喜多秀家をはじめとした諸将の危機 家康の居所となっていた大坂城西之丸を占拠。 島津惟新(義弘)らの諸 石田三成らは家 宇喜多秀 豪康を 感を

評定である。結果、上方で挙兵した西軍への対処を優先することとなった。 木県小山市)に召集し、七月二十五日に対応を協議した(以下「東軍」と表記)。世に言う小山 一方、西軍挙兵の報に接した家康は、福島正則ら上杉征討に従軍している諸将を小山(栃

城は陥落 二十一日に清須を出陣した。そして、二十三日に岐阜城へ総攻撃が開始され、同日中に岐阜 福島正則ら諸将は、家康に先立って東海道を西上し、正則の居城・清須城 西軍に味方した織田秀信の岐阜城(岐阜県岐阜市)を攻略するために、八月 (愛知県清須市)

家康は同月二十七日に岐阜城攻略の報せを受けると、九月一日に江戸を出陣し、 西上を開

寺恵瓊ら毛利軍、 三成も、 東軍の美濃国侵攻を受けて、伊勢国に展開していた毛利秀元、 吉川広家、

北陸に展開していた大谷吉継らを美濃国に集結させた。

石津町) に籠る三成ら西軍主力は、 九月十四日、 を経由して関ヶ原へと転進する。そして、その動きを受けて東軍も三成らを追って 家康が美濃赤坂(大垣市赤坂町)に着陣。 福原長堯らを守将として残し、夜間に城を出て、牧田(大垣市上 これを受けて大垣城(大垣市郭町)

の背景

垣市楽田町)

には島津惟新が駐屯してい

進軍し、

両軍は関ヶ原で激突した。

西軍は大垣城に石田三成、 ずは、 三成らが関ヶ原へ転進した理由を考えたい。 宇喜多秀家、小西行長らが在り、 家康が赤坂に着陣し 大垣城から北へ約三㎞ た九月十四 一の楽でん

大垣 長宗我部盛親が布陣。 近城か 小川祐忠、 ら西へ約九㎞ 朽木元綱、 の南宮山一帯には、伊勢から駆けつけた毛利秀元ら毛利軍、 さらに北陸から駆けつけた大谷吉継、 赤座直保が、山中 (関ケ原町山中)・藤下 平塚為広、 (関ケ原町藤下)一帯に 戸 .田勝成、 長束正

方の東軍は、赤坂、垂井(岐阜県垂井町)を押さえており、 楽田から約三㎞北にある曽根

布陣。

そして、

松尾山には小早川秀秋が入っていた

(次頁の図)。

の福東城 うに駐屯している。 城 楽田を牽制。 大垣 (大垣市長松町) には、 市曽根町)に水野勝成、 (岐阜県輪之内町) 大垣城と南 また、 宮山の 一柳 直盛が楔を打 には 大垣 西尾光教が駐屯 一城か 間に位置する長松 市橋長 5 南 勝 約 が 駐 九

ていた (図1)。

では 意味しており、 陣 から打って出て赤坂の東軍を打ち破ることは容易 た軍役を上回る兵数を率いており、 力の増強が可能となり、 らは、西上する過程で領地に立ち寄ったことで兵 であった。また、 このように、大垣城は東軍に囲まれてい したことは、 なかった。 東軍 東軍 こうした状況下、 東海道に所領を有する福島 の戦略 の戦力に余裕 上杉征討の際に課せられ の幅は大きく広が 家康が赤坂 が 西軍 出来たことを 中が 大垣 る状況 へった 正 城 則



図 1 関ヶ原周辺図

のである。

する二日前(九月十二日)の時点では、先に南宮山の毛利軍を殲滅する構想であった(「大阪 とって大垣城に籠っての持久戦は、決して良い作戦とはいえない。 仮 に南宮山が攻撃を受けて壊滅させられた場合、大垣城は完全に孤立してしまう。 実際、 家康は赤坂 西軍に 派に到着

歷史博物館所蔵文書」)。

議し、 居る) を取った。(東軍は)大垣に抑えの軍勢を残して、家康は京都へ進軍するとの情報が、(西軍 で島津惟新に従っていた神戸久五郎の覚書は、関ヶ原転進の過程を「赤坂の岡山に家康が陣 三成らの関ヶ原転進には、大垣城孤立の危機のほかにも大きな理由があった。 大垣に入った。(西軍は)そうなっては一大事であると、関ヶ原に出て勝負しようと決 九月十四日夜に大垣を出立した」と記している。この覚書は、関ヶ原の戦 当時十四歳 か ら半世

紀後に記された記録である。 いる本隊が関ヶ原を突破して上方を目指すことは可能であり、 しかし、豊臣系大名を大垣城と南宮山の抑えに残して、 一日でも早く大坂城を奪還し、 家康率

関 ヶ原の戦 り、「稲熊市左衛門、平井源太郎と申す牢人、小坂助六(雄長)、 いに福島正則の隊に属して戦った生駒利豊は、後年に関ヶ原の戦 若党 の清蔵と いの様

豊臣秀頼を推戴する必要がある家康にとって、最良の作戦といえる。

柄を立てた者は一人もいなかった。森勘解由は、 申す私 (利豊) の家来、この四人が手柄を立てた。右のほかには、たうけ(藤下)より前で手 たうけ(藤下)を越えてから討死した」と

書かれている(「生駒陸彦氏所蔵文書」)。この記述から、 合戦は大関 (関ケ原町松尾)

藤下に至るまでが激戦であり、それ以降は追撃戦であったと考えられ

収載 心に展開 塞いで東軍 関 (ケ原 の布陣図 戦 の進路を阻む必要があった。 ٧١ は、 明治二十五年 東軍による街道突破戦であり、 は、 (一八九二) その特徴をよく表している。 そのため、 に郷土史家・神谷道一が著した 戦いは大関と小関 西軍は東山道 (中山道) (関ケ原町関ケ原) 『関 原合戦図志』 と北国脇往 を中 還を

合戦の経過 (通説)

(第一号図)

過をみていきたい(図2参照)。

参謀本部編纂の『日本戦史・関原役』の記述をもとに通説となっている合戦の経

て北国脇往還を押さえ、笹尾に本陣を置いた。島津惟新は、小池 九月十四日夜に大垣城を出発した西軍は、翌十五日の午前一時に石田三成が小関に陣取 (関ケ原町関ケ原)

つ

その前方に島津豊久が陣取り、 石田隊と島津隊で北国脇往還を挟ん でいい

到着した宇喜多秀家は兵を前隊と本隊に分けて南 天満山の前に布陣 て到着した小 一西行長は、 梨木川 (寺谷川)を前に、 北天満山を背に じた。 i て布陣。 最後に

大谷吉継は初め山中の高地にいたが、 三成らの関ヶ原転進を受けて兵を進め、

関

木元 の藤川) してい 綱 を前に 赤 座 直 保 て陣取 大谷隊と東山 った。 脇 叛 道 を 挟 小 む形 Щ 祐 忠

毛利 の位 松尾 置 軍 は Ш 前 長宗 に は 日と変わ 我部! 小 卓 盛親、 ΙİΙ って 秀秋 長 い 東 な 南 正 宮 家 Ш が 帯 在 ŋ, K は 毛利 n 秀元 5 の 隊 5

縦隊 家康 東 重 は で 桃配 知 東 進 は 軍 る み、 は 午 Шé 前 左 に 関 進 は =本 福 時 ケ 軍 陣を定め 原 か を止 島 5 0 正 西 則 東 め Ш て霧 道 帯 右 に は を が 黒 西 西 晴 軍 上 れ 長 が . る 始 展 政 の 開 が め を待っ 先頭 7 غ る 列

に向

か

戦端

を開

い 隊

た

(福島

正則

松平忠吉と井

伊直政

の行為

は抜

け駆けとなる)。

が、

先陣 前

の福

島

正

則

0

側

面

を抜けて西軍

、時頃

東軍

Ó

松平忠吉

(家康四

男

た正

則

は

東山道を進んで宇喜多隊を射撃した。 が先陣であった の宇喜多隊 と井伊 これを見 た 福 直 布 め 政 朽 陣 北国脇往邊 笹尾 爲石田三成 黒田長政 △島清興 小関 細川忠興 DD 島津豊久 徳川 加藤喜明 田中吉政日 北天満山/3 【一金森長近 東山道 □松平忠吉
□井伊直政 野上 √√池田輝政 玉城 南天満山 心心本多忠勝 家康本陣 石原峠宇喜多秀家◇ 内 宮上 ⇔永広高 大谷吉継公 △ 吉川広家 藤堂高虎 戸田勝成ひ -京極高知 長束正家凸 南宮山 安国寺恵瓊凸 平塚為広 毛利秀元凸 脇坂安治 赤座直保 - 朽木元綱 長宗我部盛親 凸 小川祐忠 小早川秀秋 🖒 松尾山

図 2 通説の布陣図 『日本戦史・関原役 附表・附図』の付図を、著名な武将(部隊)に絞って簡略化した。

隊の銃声を聞い を攻め、 織田有楽らは小西隊に向かい、 て、 ほ かの東軍諸隊も攻撃を開始。 田中吉政、 細川忠興、 藤堂高虎、 京極高知、 加藤嘉明、 寺沢広高 金森長近 らは は大谷隊 田

出撃の合図をした。 三成 戦機 の熟すのを見計らって狼煙を上げ、 しかし、 いずれも応じなかった。 松尾山の小早川秀秋、 南宮山の毛利軍に

隊に向

かった。

利軍 とは わしてい 南 しなかった。 宮山では、 の前隊を率いる吉川広家と福原広俊は前 開戦を知った長東正家と安国寺恵瓊が、 松尾山の小早川秀秋もまた、 日に東軍と不戦の密約を交わしており、 東軍に内通しており、東軍に寝返る密約を交 毛利軍に出撃を促した。 しか 動こう

ず」と答えると、 方、家康は南宮山の動きを心配し、本多忠勝に相談した。そして、 九時を過ぎた頃に関ヶ原に進軍した。本多忠勝は、南宮山が動かないこと 忠勝が 一憂うに足ら

は強固 康は十一時頃、 であ Ď, 正午近くなっても勝敗 更に三、 四 百 m ほど前進し、 は つかなか つ 東軍諸隊も全力で攻撃したが、 Ťz 西軍 を見抜いて最前線に進出し、

島津隊へ向かった。

向背を確かめよ」と命じ、 だ東軍に寝返る気配のない小早川秀秋に対して業を煮 徳川と福島の鉄砲隊が松尾山に向かって数発の一斉射撃をおこな やした家康は、 「誘導の銃を放ち、

秀秋は、 東軍が自身に向かって銃撃したのを見ると、 諸隊に西軍を攻撃するように命

令し、松尾山を下りて大谷隊に突入した。

なく、六百余の兵でこれを防いだ。 大谷吉継は、あらかじめ秀秋に叛意があることを見抜いていたため、この変事に驚くこと

楽らが、平塚・戸田隊を側面から攻撃。この時、藤堂高虎が、西軍の脇坂安治らに合図をす これに小早川隊も勢いを取り戻し、平塚・戸田隊は三面から攻撃を受けて壊滅。 ると、脇坂安治、 平塚為広、戸田勝成が小早川隊を撃退し、追撃を始めると、藤堂高虎、京極高知、織田有 、小川祐忠、朽木元綱、 赤座直保も東軍に寝返り、平塚・戸田隊に向かった。 平塚為広と

戸田勝成は戦死、 大谷吉継は自害した。

走した。石田三成は、黒田長政、 小 早川 .秀秋の寝返りによって、 田中吉政、 西軍諸隊に動揺が走り、 細川忠興らと数回にわたって激戦を繰り広げて、 小西行長、次いで宇喜多秀家が敗

した。そこで島津惟新は、 島津隊も、 島津豊久が一斉射撃で応戦するが、東軍の突入は止められず、半数以上が死傷 敵中を突破して牧田から西南に逃げることに決め、全軍一団とな

午後にも及んだが、

小西・宇喜多の敗走を受けて崩れた。

久は馬を返して奮戦するが、討死。島津家臣・長寿院盛淳も、自ら「兵庫入道(島津惟新)」 って突進を始めた。福島正則、小早川秀秋、本多忠勝、井伊直政が、島津隊を追撃。島津豊

けるが、 島津惟新が多良(大垣市上石津町)に向かっている時、松平忠吉と井伊直政が追い 島津隊の奮戦によって忠吉は負傷、 直政も狙撃されて負傷する。 その後、 家康 打ちをか の追

を名乗って奮戦の末、討死した。

合戦像をめぐる新説を検討する①

撃中止命令が下り、午後二時半に戦闘は終了する。

軍記大成』には「誘鉄炮」、『日本戦史・関原役』では「誘導の銃」と記されているように、 こなわれ、様々な新説が発表されている。中でも広く知られているのは、家康が松尾山への 斉射撃を命じたのはフィクションとする説であろう。この一斉射撃は、宮川忍斎の『関原 前節で通説となっている合戦の経緯について述べたが、近年は合戦像の見直しが盛んにお

あり、 九八四)。そして、近年では白峰旬氏が、一斉射撃のエピソードは『井伊家慶長記』 小早川秀秋の寝返りを促す引き金として、合戦の転換点に位置づけられている。 と考えられる点などから、このエピソードは約四十年前から疑義が唱えられていた(藤本 かし、東軍の最前線から松尾山まで約一・三㎞の距離があるため、射撃を認識できない その内容は、藤堂高虎が小早川秀秋の陣に空砲を打ち込み、秀秋が反撃して来な が初見で

を見て、寝返りは疑いないと確信したという別の話であったと指摘。

さらに逸話の変遷を整

理したことで、文献史学の面からも否定がおこなわれた(白峰:二〇一四)。

となっている二つの新説を取り上げて検討していきたい。 には慎重となり、十分に検討をおこなわなくてはならない。そこで本稿では、このほか話題 このように、新説によって合戦像が一変してしまうことがある。それゆえに、 新説 の採用

代に創作した歴史的根拠のない布陣図であると評価した(白峰:二〇一四)。まずは、 関原役 附表・附図』収載の図(以下「日本戦史の図」と表記)が基となっており、 江戸時代に流布した関ヶ原の戦いの布陣図をトレースしたものではなく、 すく改良したものが一般書に使用されている。この「日本戦史の図」に対して、 図2は、関ヶ原の戦いの布陣図として広く知られているものである。これは『日本戦史・ 参謀本部が明治時 白峰旬氏は、 それを見や

を取り上げたい。

究に基づいて『日本戦史・関原役』は編纂されている。「日本戦史の図」が、歴史的根拠のな した神谷道一と交流があり、『関原合戦図志』の稿本を校閲しているように、 た編纂がおこなわれている。 原の戦 結論 いの関係史料が一三六点収載されているように、『日本戦史・関原役』 から述べると、 この評価は不適切である。『日本戦史・関原役 文書補伝』には、 また、編纂委員の竹内正策と横井忠直は、『関原合戦図志』を著 多くの調査・研 は史料に基づい 関ケ

い図であるとは考えられない。

置で 年 た布 期に成立した布 て 江 は違 ٧Ì 陣 ,時代に 図 の V١ そし 形 が 流 み 式 成立 陣図 7 られるもの 布 に ٦ ظ 大別される。 Ü の形式と、 収載 た 本戦史の 布 陣 Ő の 図 図 は、 に代表される江 図 西軍 江 二つは、 芦 \neg 武 も -諸将 ,時代中期 家事 西 の 東 紀 軍 配 軍 置 諸 12 将 将 成 時 延宝 は 立 類 代 0 の 配 似 配 前

の語 置は 切り崩 は前 に応 西軍 は、 次第ということもなく、 東照 Ū 軍 代未聞のことで、 りと伝えられているものとして「このような大 のように計 東軍は三成らを追って関ヶ原へ移動しているため、 江戸時代の 語将 宮御 ぐう 7 陣 実紀』 の配 を移動させたと考えられる点が挙げられる。 追い留めるということもなく、 置 布 画 には、 が布陣 陣図 的な布陣が出来なかった点や、 軍 [と類似してい 先を競って攻めか :図によって違い は順序なく入り交わり、 福島家臣であった大道寺直 がみられるの か 四方八方 つ て 戦局 敵 作 戦 次



図3 筆者作成の布陣図 武将(部隊)は史料から布陣地を判断できるもののみを記している。

敵を追行したので、なかなか傍らを見ることはできないように見受けられた」と記されてい る。この言葉は核心を突いていよう。

成した布陣図である(水野:二〇二二b)。図2と図3を比較しても、 図3は、 料との関係性は認められる。歴史的根拠のない布陣図という評価は改めなくてはならない。 政が福島正則と離れて布陣している点については、江戸時代中期の布陣図にもみられる。 ついては、江戸時代前期に成立した形式の布陣図にみられるものであり、松平忠吉と井伊直 「日本戦史の図」は、参謀本部が調査・研究に基づいて作成したものであり、江戸時代の史 白峰旬氏が「日本戦史の図」に対して疑義を唱えている福島正則の陣が突出している点に 関ヶ原の戦いに参戦した武将の覚書など、比較的信憑性の高い史料を基に筆者が作 極端な違いはみられず、

合戦像をめぐる新説を検討する②

現状、「日本戦史の図」で合戦像をとらえても支障はないといえよう。

ならば、西軍はあらかじめ関ヶ原を主戦場と決め、そこに東軍を誘い込んだこととなるため、 える本陣として築いた陣城であるとする説をみていきたい(千田:二〇二一)。この説による 北天満山から西に約二㎞ の城山の山頂にある城跡(玉城)は、西軍が豊臣秀頼を迎

西軍の関ヶ原転進のイメージは一変する。

かし、 結論から述べれば、この説は成り立たない。まず、 西軍に豊臣秀頼を戦場に迎え

画

[は無かった点が挙げられ

伝していたであろう。 があったならば、 えていても、 の首脳部から諸大名へ宛てられた書状はいくつか伝存しているが、 秀頼の出陣に関しては全く言及していない。仮に豊臣秀頼を戦場に迎える計 実現性が低かったとしても、 そうしなかったのは、秀頼の出陣という発想そのものが無かったこと 多数派工作のために、 秀頼 秀頼 の出 陣を方々に喧 への奉公は訴 画

ろ、秀頼の馬廻衆一同が断固として反対し、約六万人いる馬廻衆の支持を失った家康は、 語った情報として、家康が上杉氏征討に際して、秀頼を伴って会津へ下向しようとしたとこ を物語っている。 上杉家臣・来次氏秀は六月十日付けの書状で、上杉景勝に仕える船頭が大坂から下国して

隊の編成に苦労しているという話を記している(「杉山悦郎氏所蔵文書」)。 豊臣家の家老である三奉行が味方し、秀頼を推戴した西軍にとって正当性は十分であり、

むしろ八歳の主君を戦場へ送り出す計画を立てる方が、周囲からの支持を失う危険があった

造となっている だ玉 城 ぼ 曲輪が西側に連なっており、 (東軍が布陣する方角と逆)。 堀切も西側に設けられ、近江方面を意識した構

陣している。しかし、玉城は東山道と北国脇往還のいずれも山を隔てて離れており、街道の そこに西軍が巨大陣城を築く理由はないのである。 防衛拠点として適していない(図2参照)。玉城は、 立たなかった点である。 面しているため、 この説の最大の違和感は、関ヶ原が戦場となったにもかかわらず、 上方への進路を塞ぐことが可能である。 例えば、 西軍が伊藤盛正に城として整備させた松尾山 関ヶ原の戦いで活躍できる場所にはなく、 玉城に関ヶ原の戦いとの関係性は認めら ゆえに松尾山には小早川 玉城 は、 秀秋 東山 が全く役 道に が

以上、 話 !題となっている新説を取り上げたが、一 斉射撃のエピソードの否定以外は妥当で

れない

な 通説 も完璧とはいえないが、 現状は通説で合戦像をとらえるのが堅実といえよう。

戦 後 処理

家

康

は、

関

ヶ原の戦いで大勝利を挙げたが、

東山道を進んでいた徳川秀忠の隊が

決戦

にお によるものであった。そのため、彼らに対する政治的配慮から、 その兵力の割合は、 戦できなか いて備を構成して前線で戦える重臣は、松平忠吉、井伊直政、本多忠勝しかいなかった。 ったという引け目があった。 東軍の前線部隊の約五分の一であり、そのほかは福島正則ら豊臣系大名 秀忠の隊が到着していなかったため、 西国に豊臣系の国持大名が 関 ヶ原の 戦

徳川氏の思いの儘 大功を立てた大名に対する配慮はあったものの、 戦後の領知配分には、 片桐且元ら豊臣秀頼の老臣も参画していたが、 家康は大勝利によって独裁的権力を不動

であったという(「隈部文書」)。

多く輩出された。

かったのである。 配分・ ける権力闘争にすぎず、 かし、 給付 の主体は豊臣秀頼であり、 家康に課題が無かったわけではない。 家康の形式的な立場は大老の一人にすぎなかった。 家康の名をもって領知宛行状を発給することができな 前述のように関ヶ原の戦いは豊臣政権 依然として領知 にお

給付の主体が誰かという問題を曖昧にしたのである。そして、目録の最後に「次は(家康か 給した目録をもって領知の配分をおこなった。領知宛行状を発給しないことで、領知配 配分・給付 ら)御朱印(領知宛行状)を頂戴して(貴方に)差し上げます」の一文を副えることで、 康 はこの課題を克服するために、領知宛行状の発給はおこなわず、伊奈忠次ら吏僚が発 !の主体が家康であると示唆する布石も打ったのである。

の印 を完全に掌握し、 判が捺された領知宛行状が確認できるようになる。 関 アケ原 徳川政権を樹立するための土台が出来上がったのである。 の戦いから二年後(慶長七年九月)には、 この時をもって、 諸大名の領知宛行にお 家康は領知宛行権 いて、

太田浩司「慶長五年九月十五日に何が起きたか 『関ヶ原合戦』当日の再検討」 (太田浩司編『石田三成 -関ヶ原西軍人

岐阜県教育委員会編『岐阜県中世城館跡総合調査報告書』第一集(二〇〇二年)

脈が形成した政治構造』宮帯出版社、二〇二二年

小池絵千花「関ヶ原合戦の布陣地に関する考察」(『地方史研究』四一一号、二〇二一年)

白峰旬『新解釈 関ヶ原合戦の真実 ――脚色された天下分け目の戦い』(宮帯出版社、二〇一四年)

千田嘉博 「戦国の戦乱2」(亀田俊和・倉本一宏ほか『新説戦乱の日本史』SBクリエイティブ、二〇二一年)

藤本正行「関ヶ原合戦で家康は小早川軍に鉄砲を撃ち込ませてはいない」(『歴史読本』-九八四年二月特別増刊、新人物往来社)

水野伍貴 『関ヶ原への道・ ――豊臣秀吉死後の権力闘争』(東京堂出版、二〇二一年)

「関ヶ原の役における吉川広家の動向と不戦の密約」(『研究論集歴史と文化』 五号、二〇一九年)

「関ヶ原合戦後の国割に関する一考察」(『十六世紀史論叢』一六号、二〇二二年a)

水野伍貴 水野伍貴

水野伍貴「関ヶ原合戦布陣図作成に向けた一試論」(『研究論集歴史と文化』第一〇号、二〇二二年b)



「ジセダイ」は、20代以下の若者に向けた、 行動機会提案サイトです。読む→考える→行 動する。このサイクルを、困難な時代にあっ ても前向きに自分の人生を切り開いていこう とする次世代の人間に向けて提供し続けます。

メインコンテンツ

ジセダイイベント

著者に会える、同世代と話せるイベントを毎月 開催中! 行動機会提案サイトの真骨頂です!

ジセダイ総研

着手専門家による、事実に基いた、論点の明確な読み物を。 「議論の始点」を供給するシンクタンク設立!

星海社新書試し読み

既刊・新刊を含む、 すべての星海社新書が試し読み可能!

マーカー部分をクリックして、「ジセダイ」をチェック!!!

行動せよ!!!